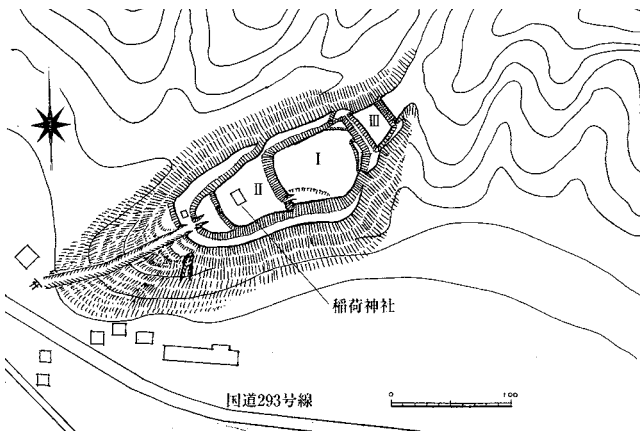


江戸新五郎の墓

◇鳥子江戸氏
ゆかりの地

美和地域鷺子地区。市の北西端で栃木県那珂川町(旧馬頭町)、那須烏山市(旧烏山町)と隣接するこの地域は、中世には下野国境の村として、江戸氏が城を築き、治めていました。

を断ち切っています。現在、二郭は稲荷神社の境内地となり参道も付けられているので見学しやすくなっていますが、城跡と、その南側の「柵古屋」と呼ばれる家臣団住居跡と推定される地、兵士達の平時の生活空間、また、庶民の居住空間としての町場(鷺子宿)がひとつの空間として想定できる貴重な例です。



※右図は河内館縄張図で、余湖浩一『図説茨城の城郭』より転載したものです。

鳥子江戸氏の本拠、河内館跡は、国道二九三号線を挟んで鷺子宿の北側の尾根上に位置する山城です。現在も三つの曲輪(周りを堀や土塁で区切られた一定の広さの平坦地)や城跡の周囲を取り巻く帯曲輪、腰曲輪状の地形を確認できます。主郭はおよそ五〇メートル四方の広さをもち西側に二郭、そして街道、鷺子宿に面します。東側は尾根が続きますが、三郭の東端に堀切を設け、尾根

◇江戸新五郎とは

初代河内城主通治以来、一八〇年にわたってこの地を治めてきた江戸氏も主家である佐竹氏の秋田移封に従い、常陸を去りました。慶長七年(一六〇二)、通家の時でした。新五郎通憲はこの通家の子です。通憲は秋田に移住後、体調を崩したため、ひとり住み慣れた鳥子に帰って来ました。鳥子には江戸氏の家臣が多く土着していて、一族でもとの家臣の小林重広・広義父子のもとに身を寄せ、養われていました。寛永一九年(一六四二)に没し、善徳寺に近い小林家の土地に葬られました。今その地を「殿島」と呼んでいます。



▲河内館の登り口

その後、広義より四代あとの広高が通憲の墓碑を建てようとしたが果たせず亡くなると、曾孫の広安が水戸藩の儒官で医師の村田隆民と共に文化六年(一八〇九)に墓碑を建立しました。碑文を作成した村田隆民は、医師として寛政十一年(一七九九)に

御目見格、文化三年に五人扶持を賜り、同九年まで鷺子陣屋付でした。「扶持」は藩からの支給米のこと。一日あたり五合を基礎として月俸一斗五升、年一石八升に相当)。鷺子陣屋とは、水戸藩の郡制改革により享和二年(一八〇二)から文化一二年(一八一五)まで鷺子に置かれた郡奉行所のことです。隆民が通憲の墓碑建立にかかわるきっかけはわずか十三年の郡奉行所勤めだったと考えられます。この後、隆民は藩医として着々と昇進し、文政二年に江戸詰めめの表医師、文政十一年には二十五人扶持まで加増され、天保五年(一八三四)六十九才で亡くなりました。墓碑の前には六つの土盛りがあり、江戸氏旧臣の墓と伝えられます。現在も地域住民により草刈りなどの手入れがなされ、花が手向けられています。



▲江戸新五郎の墓

△参考文献

- 特別展図録『館(たて)と宿(しゆく)の中世—常陸大宮の城跡とその周辺—』2009・『美和村史』1993
- 歴史民俗資料館大宮館 52—1450